

異本『粹興奇人伝』

— 解題と影印 —

佐藤 悟

解題

『粹興奇人伝』は山々亭有人と仮名垣魯文の編輯になるもので、文久三年に刊行された。内容は粹狂連・興笑連の同人の画像、略伝、三題噺を集めたもので、三題噺、興画合、悪摺などの関係者の伝記研究には不可欠のものである。複製本が武藤禎夫編『未翻刻江戸小咄本十一集』（近世風俗研究会、一九六八年）に備わる。

異本『粹興奇人伝』（個人蔵）は刊本の校合本に相当するものである。彫り残しがあり、刊本との異同も見られるが、校合を行った形跡がないので、校合本ということはできない。小寺玉晁が入手した経緯も不明である。刊本とは彫り残し以外に次のような異同がある。この異同を発見されたのは故向井信夫氏であった。異本では刊本の「木しら雪」（300頁収載図版A）という三題噺の作者名が「松裏紅花舛」（図版6）、「好文舎花兄」（308頁収載図版B）が「松花園楽雅」（図版

13)、「山衣細道」(316頁収載図版C)が「蒼仙齋東甫」(図版20)と記されている。これらにより木しら雪が『かくやいかの記』の作者長谷川元寛であることや、^(註1)山衣細道の略伝にみえる東甫が山衣細道その人であることが知られる。

底本書誌

体裁 中本 縦十八・一糎、横十二・二糎

丁数 二十七丁(キヤプションに記した丁付は刊本による。但し「上1」は原本丁付なし。)

外題 「粹興奇人伝 全」(書き題簽)

柱 「三題はなし」 「三題ばなし」

画工 「一恵斎芳幾」

筆耕 「宮城楓阿弥(玄魚)・武田交来」

板元 「丸屋徳蔵」

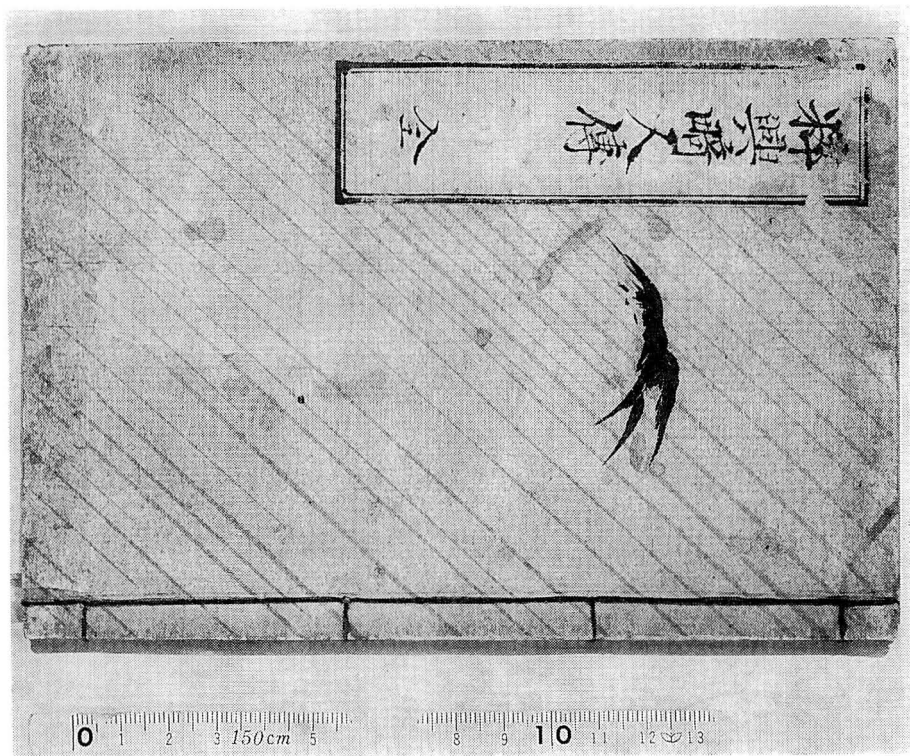
備考 本書に欠く刊本の見返し、刊記によって知られた情報は「」で示した。

註1 拙稿『『かくやいかの記』の周辺』(『国語と国文学』一九八四年六月)

追記

異本(図版15)の三題晰作者名「文溪・舎栄寿」は刊本後摺本では入木により「文桂・舎栄寿」と訂正されている。

図版 1 (表紙)



此は之の源に於ては、此は之の源に於ては、 康我威門
 抄之れ、抄之れ、 其の源に於ては、其の源に於ては、 康我威門
 毒の如き之れ、毒の如き之れ、 其の源に於ては、其の源に於ては、 康我威門
 毒の如き之れ、毒の如き之れ、 其の源に於ては、其の源に於ては、 康我威門

此の源に於ては、此の源に於ては、 康我威門
 抄之れ、抄之れ、 其の源に於ては、其の源に於ては、 康我威門

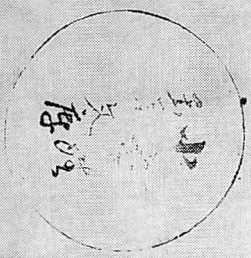
此の源に於ては、此の源に於ては、 康我威門
 抄之れ、抄之れ、 其の源に於ては、其の源に於ては、 康我威門

此の源に於ては、此の源に於ては、 康我威門
 抄之れ、抄之れ、 其の源に於ては、其の源に於ては、 康我威門

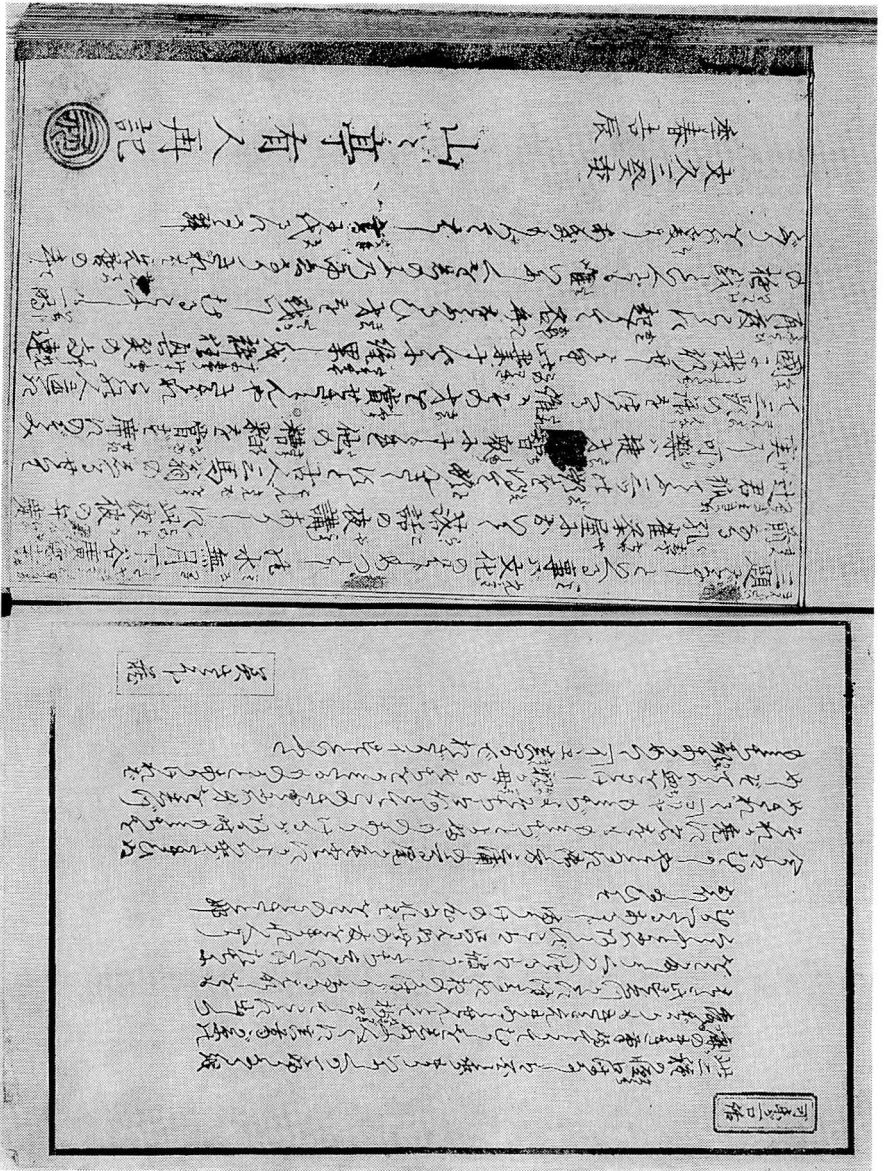
此の源に於ては

抄之れ

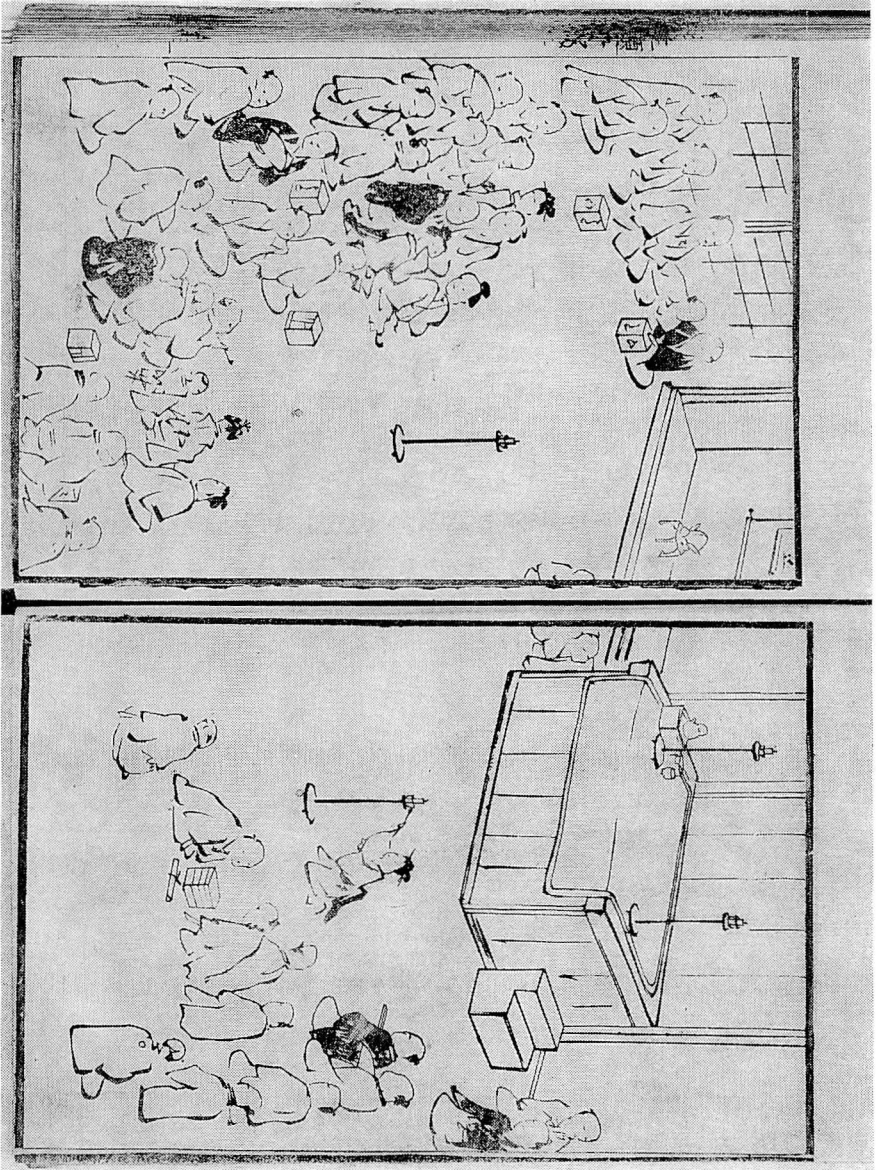
康我威門



図版3 (上1ウ・上2オ)



図版 4 (上 2ウ・1オ)



図版 5 (14・3木)



図版 6 (37・4才)



図版 8 (5・7・7)



(二) 柳 (一)

彼牡丹者柳老人...
 牡丹者老人...
 柳者...
 山之有有人...

牡丹
柳

五世門...
 如...
 業...
 關...
 一...
 女...
 一...
 一...
 一...
 一...
 一...
 一...

図版 10 (8ウ・9ナ)



檀弓の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。



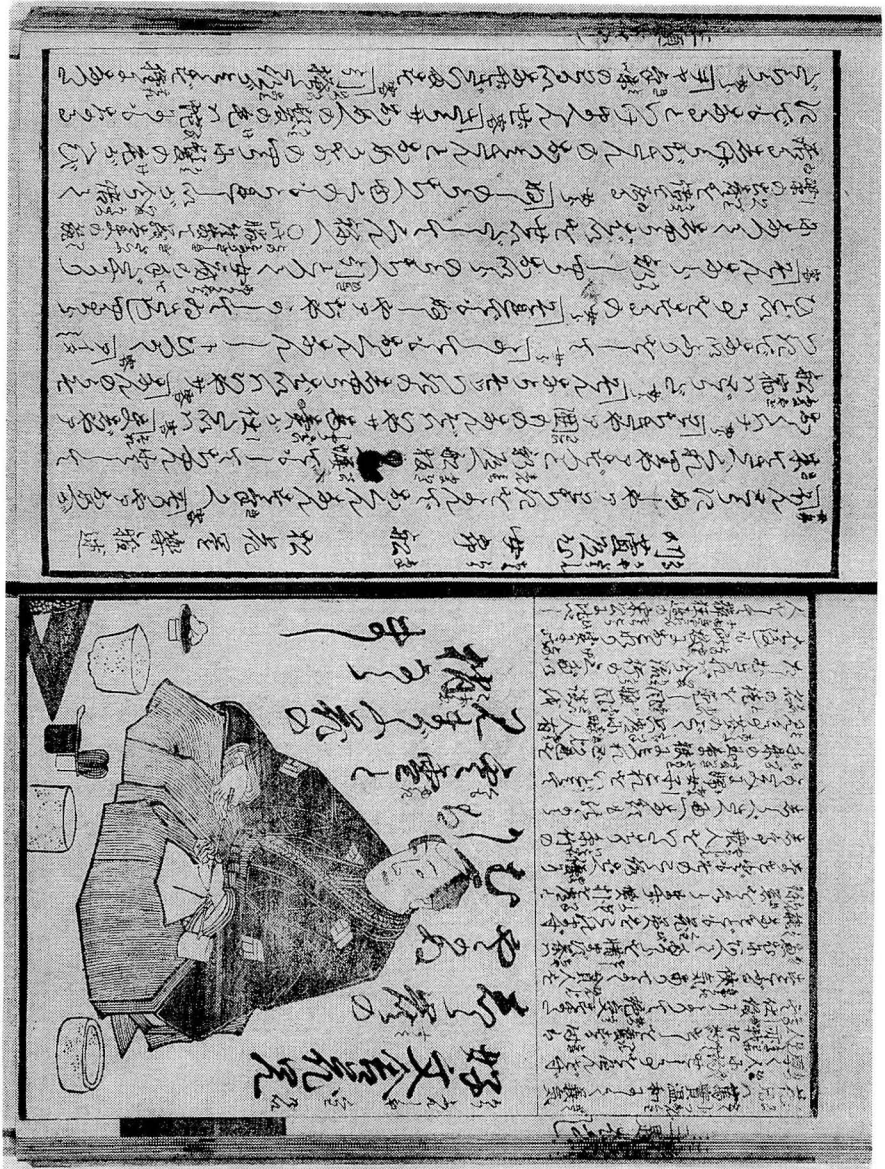
徳國釋松
 海國松
 一豆
 海國松
 徳國釋松

海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。
 海國松の節。一豆。海國松。徳國釋松。

図版12 (107・11才)



図版13 (114・124)



図版 15 (13p・14p)



大晦日 歌紙 萬遍
 立川 綾志 作

第九中何止に狂歌も 狂歌も 狂歌も 狂歌も
 第十 三 第九から第十 (かみまき起) まで一んだた
 第十一 何れも 狂歌も 狂歌も 狂歌も 狂歌も
 第十二 何れも 狂歌も 狂歌も 狂歌も 狂歌も
 第十三 何れも 狂歌も 狂歌も 狂歌も 狂歌も
 第十四 何れも 狂歌も 狂歌も 狂歌も 狂歌も
 第十五 何れも 狂歌も 狂歌も 狂歌も 狂歌も
 第十六 何れも 狂歌も 狂歌も 狂歌も 狂歌も
 第十七 何れも 狂歌も 狂歌も 狂歌も 狂歌も
 第十八 何れも 狂歌も 狂歌も 狂歌も 狂歌も
 第十九 何れも 狂歌も 狂歌も 狂歌も 狂歌も
 第二十 何れも 狂歌も 狂歌も 狂歌も 狂歌も

立川綾志の歌紙

歌紙の由来

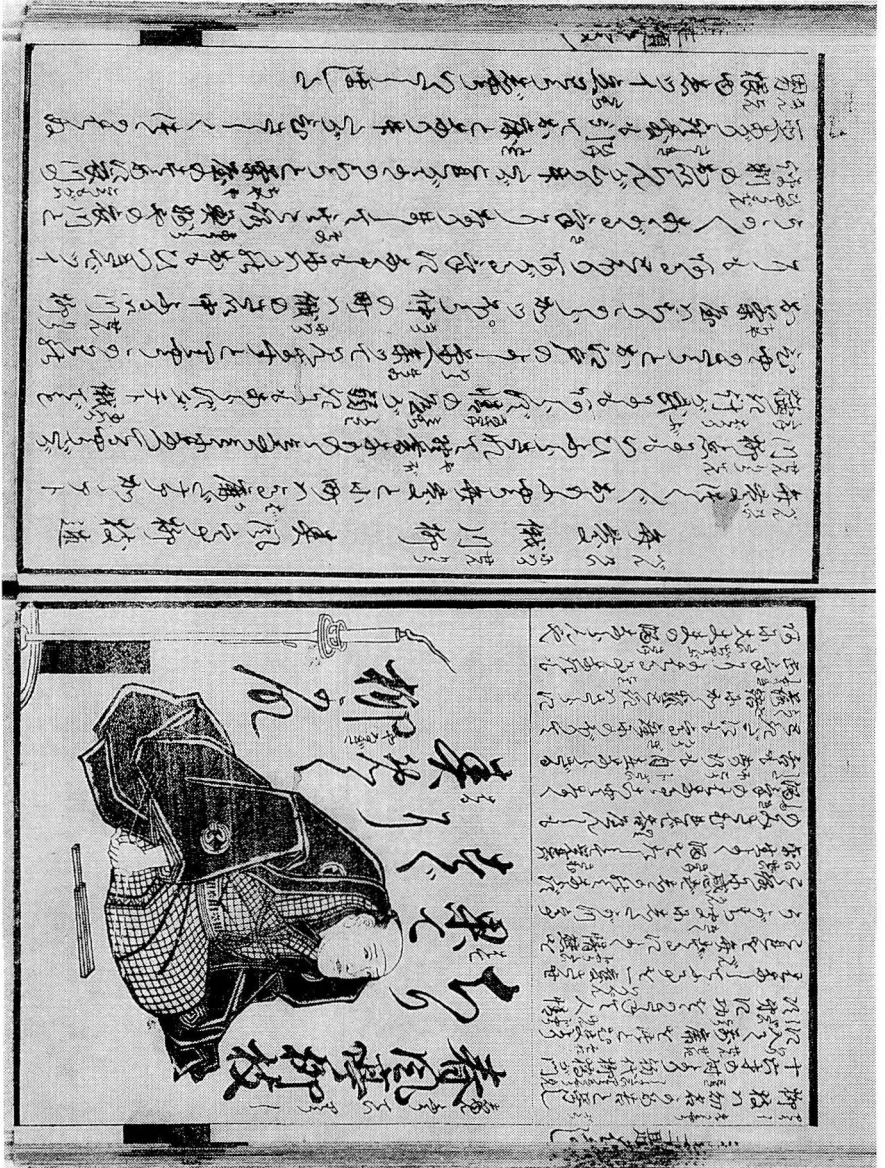
歌紙とは、新年の初詣に、歌を詠んで、紙に書いて、歌紙と云ふ。其の由来は、古くは、正月の初詣に、歌を詠んで、紙に書いて、歌紙と云ふ。其の由来は、古くは、正月の初詣に、歌を詠んで、紙に書いて、歌紙と云ふ。



図版 17 (157・16才)



図版19 (18p・19p)



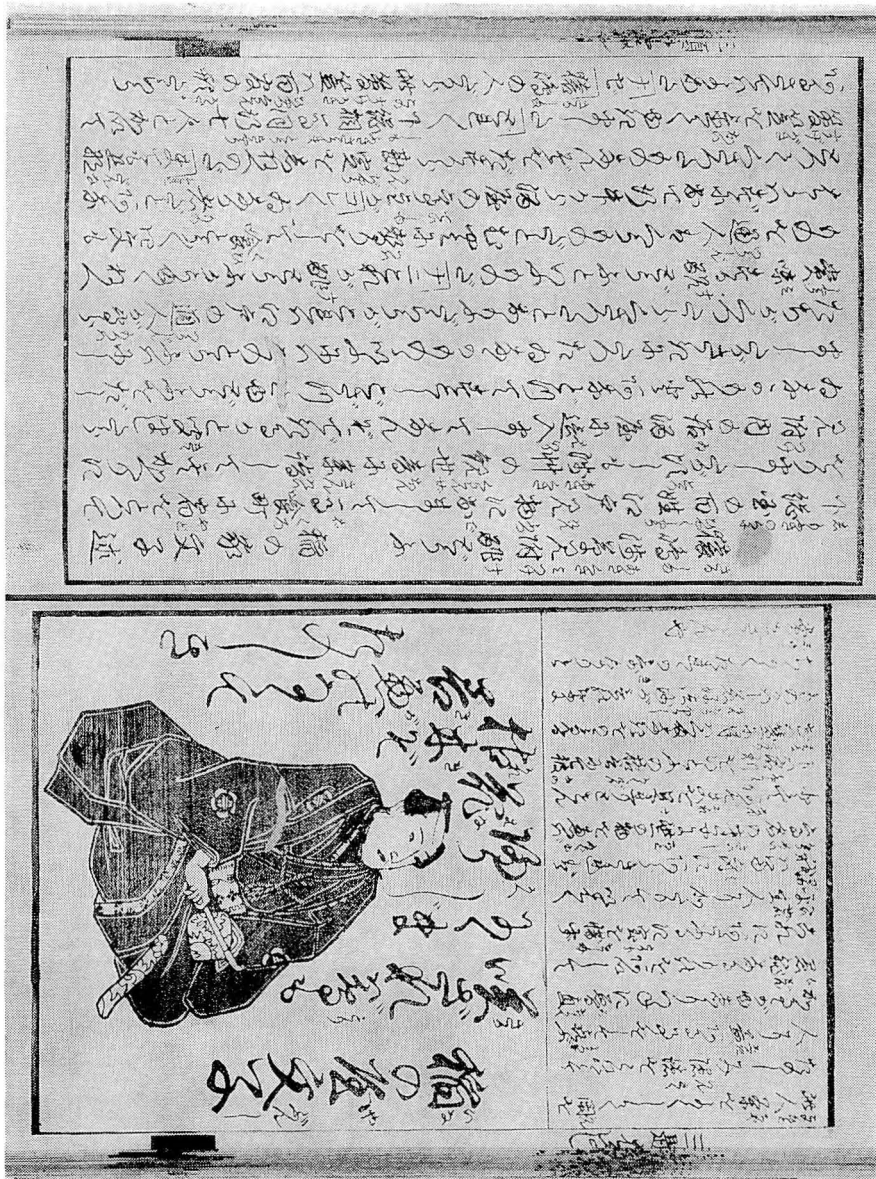


天符持 西須千
 松園子 山遊

中絶 云 云 源 千 一 光 遠 本 為 中 七 浦 の 定 武 之 跡 在 之
 浦 登 五 心 の 五 心 定 武 之 跡 在 之 浦 之 跡 在 之
 以上 殊 人 の 發 天 符 持 之 跡 在 之 浦 之 跡 在 之
 新 宮 の 英 聖 に 亦 則 主 殿 之 跡 在 之 浦 之 跡 在 之
 之 跡 在 之 浦 之 跡 在 之 浦 之 跡 在 之 浦 之 跡 在 之
 人 一 大 出 定 武 之 跡 在 之 浦 之 跡 在 之 浦 之 跡 在 之
 足 跡 亦 不 少 一 般 亦 不 少 一 般 亦 不 少 一 般 亦 不 少 一 般
 世 之 跡 在 之 浦 之 跡 在 之 浦 之 跡 在 之 浦 之 跡 在 之

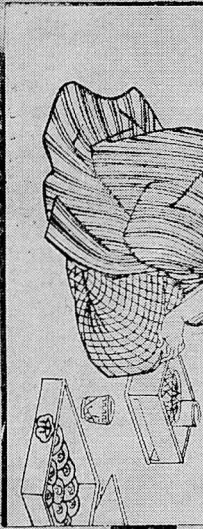


図版22 (217・22)



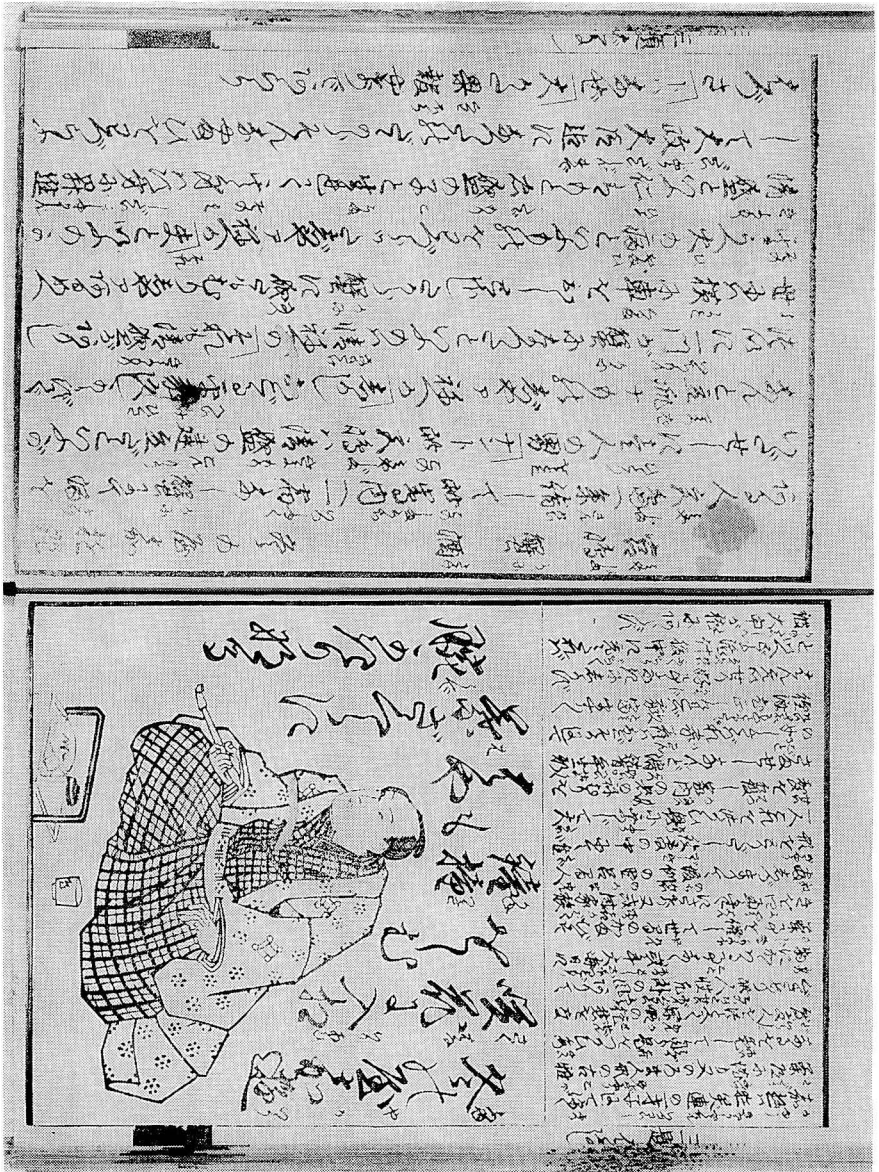
三原茶屋の歴史
 三原茶屋の歴史は、寛政十三年（1801）に
 創業された。当時は、三原地区で最も
 有名なお茶屋として知られていた。創業
 主は、三原地区の豪商であり、お茶
 屋の発展に大きく貢献した。創業以来、
 三原茶屋は、三原地区の中心として
 発展してきた。創業主は、三原地区の
 豪商であり、お茶屋の発展に大きく
 貢献した。創業以来、三原茶屋は、
 三原地区の中心として発展してきた。
 創業主は、三原地区の豪商であり、
 お茶屋の発展に大きく貢献した。創
 業以来、三原茶屋は、三原地区の
 中心として発展してきた。

三原茶屋
 金耳豊生
 如何の
 秘伝
 通

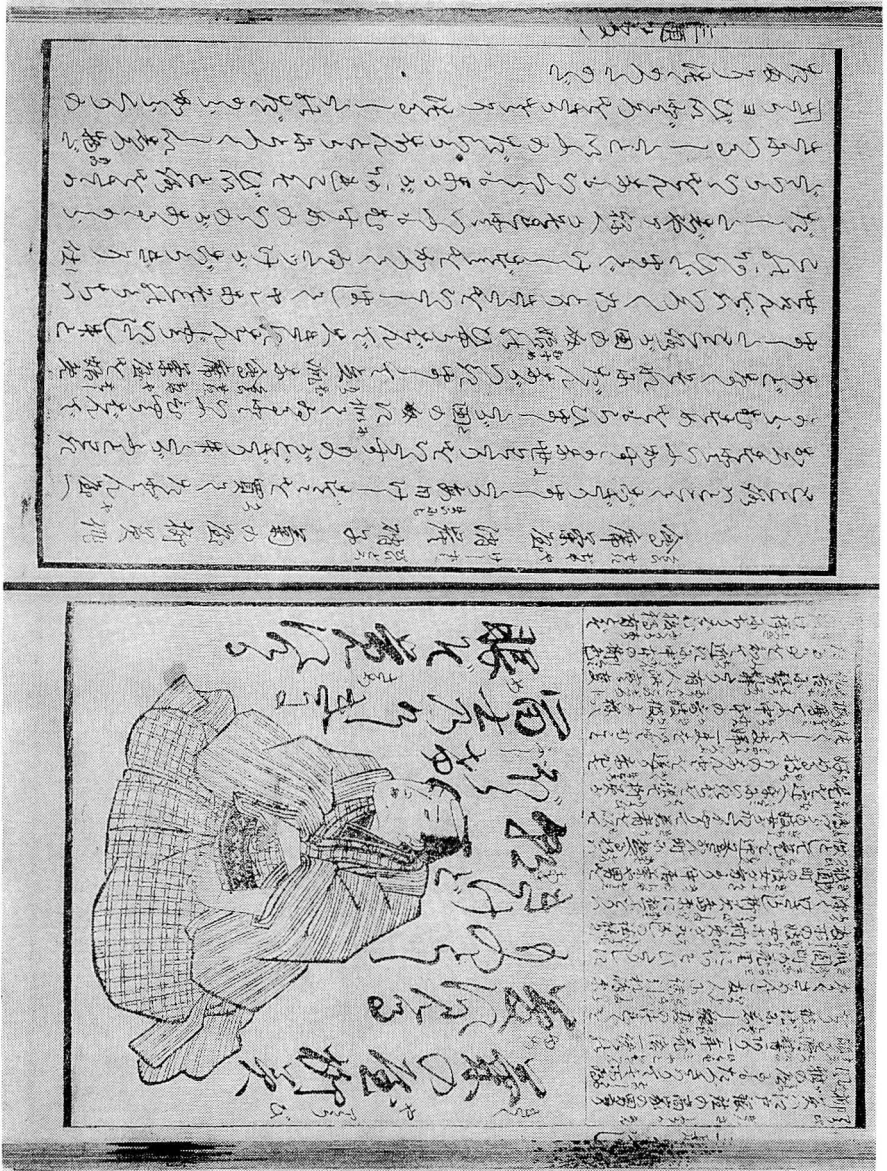


三原茶屋の歴史
 三原茶屋の歴史は、寛政十三年（1801）に
 創業された。当時は、三原地区で最も
 有名なお茶屋として知られていた。創業
 主は、三原地区の豪商であり、お茶
 屋の発展に大きく貢献した。創業以来、
 三原茶屋は、三原地区の中心として
 発展してきた。創業主は、三原地区の
 豪商であり、お茶屋の発展に大きく
 貢献した。創業以来、三原茶屋は、
 三原地区の中心として発展してきた。
 創業主は、三原地区の豪商であり、
 お茶屋の発展に大きく貢献した。創
 業以来、三原茶屋は、三原地区の
 中心として発展してきた。

図版 24 (17ウ・24ナ)



図版26 (55才・36才)



情談治じやうだんぢやうは合あはまは芳よし幾いく風かぜと云いふ包かほの脚色きゃくしきを河竹流かたけりゅう
 と總稱そうじやうぬ扇夫あふぎぬと林中ちゆうぢゆうをく、豹子ひょうし扇あふぎの藝名げいめいも附會つゝゐ
 談志だんしの異用いじやうをくく樽拾づんしゆうの丁稚ちやうぢと謬錯びやうさく如皋じやうこも長談ちやうだん全ぜん
 傳でんのひやくじゆ回かへり小髻こまげ髻まげと、柳枝やなぎえだの短話たんわ（王英わうゑいの身み材ざい）
 似にて、話説わだせつと發語はつごの禪官ぜんくわん者流しやりゆう雅言みやうげんも侍さむらいの皇國調きやうこくぢやう
 霧閣きりかくも多弁たべん地口ぢくち風銘ふうめい、家いへの大頭領だいぢゆうりやう互あひも鼻はなの高半扇字たかはんせんじ
 室むろの異風いふう凜れんと十面じゆめん達たつ、相貌しやうめい堂だう、或あるは黃口わうくちの扱名せつめい状じやうも
 即題すくだいの柳やなぎをけりぬ張懸牌ちやうけんぱいの金印きんいんをく、丸まるも紫汗藥むらさきあせぐすり

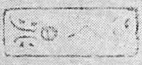
粹すい興きやう時じ人にん傳でん後ご叙ぎ
 唐山たうざんの羅氏らし水滸すいこの奇編きへんを世よに著しやくし、愉快ゆがいの說柄せつへい益やくし起原きげん
 本朝ほんぢやうの通客つうかく粹興すいきやうの晴はる人を凌りやうぎ、二題にだい論ろんを再興さいきやうせり、ゆへら
 此道このぢゆうの龍虎山りゆうこざんり比競ひけいし、有人ある玄魚げんぎよの兩邊りやうへんす去さり、歲さい
 白樂はくらく街がへある本ほん茶亭ちやていの伏魔殿ふくまぢやうも高生かうせいを開拓かいたつし、
 春はるの屋大やうだい人を始はじめし、滑稽くわき會かい酒落しゆらくの英雄いゆうゆう真傑まけつ當時たうじ諸亦しよやく
 小黨せうたうを集あつり落語らくごの集會しゆうかいを催もよほし、天國てんこく地獄ぢやくの眾皇しゆわう
 物ものの連中れんぢゆう諸子しよし癡語ちぢごの十八般じちはつぱんの家いへに樹じゆ小喻せうよ座ざを設たてし、

羅氏水滸 奇編を世に著し

図版 28 (版1ウ・版2オ)

飲子如く或ハ神行大傑の脚ハ幸類趣向の疾ヲ護香
 形も足らざる一莫應斬の甲七ハ聽主の聖教ハ批評
 以義ノ奇癖を探索テ自傳の棚小拳ヲ無用華崇
 頼多ク世名穿鑿ハ實ハ餘慶の仕傳ハ之ヲ弊恩
 傳トシテ之ヲ如ク加ハ
 于時文之三の春ハ凡レ目若水ハ魚井町
 以切一建一竹箆の間に擬ノ小亭の樓上ニ誠筆テ

假名垣魯曾文戲述



図版29 (版27・裏見返し)

図版30 (裏表紙)

